代理伯爵私と意地悪従者の恋物語

ルナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
代理伯爵私と意地悪従者の恋物語

【Ｎコード】
Ｎ３６９３Ｓ

【作者名】
ルナ

【あらすじ】
私が何故伯爵の代理などしなくてはならないんだ！！
フィアは公爵家の娘だが、伯爵位を継ぐはずだった双子の弟の逃走により弟の代理として伯爵位を継がなくてはいけなくなった。腹黒メイド、意地悪な従者、しだいに騒がしくなっていく彼女の周囲。
彼女は最後まで耐えられるのか！？

プロローグ　～私が代理伯爵になった訳～

私の名前はフィア・ラスティ・エドアルド。
エドアルド公爵の子供だ。
私は、今ふかふかとした椅子に腰かけながら、
苛立ったように眉をしかめていた。
この椅子は、伯爵位を継ぐもののためだけに
作られた、特別なものだ。
何故それに私が座っているかって？
それは、私が伯爵位を継ぐものだからだ。
否、性格には代理だが。
何故代理かって？　それは、私の性別に関係している。
私の、本名にも。私は今、金の髪を後ろで一つに結え、
伯爵にふさわしい上等な上下に身を包んでいるけれど、女だ。
本名はフィリシアナ、フィアは愛称というか、あだ名だ。
この国ニルアニダは、基本男でなくては爵位を継ぐことはできない。
どんなに優秀だろうと、力が強かろうと、駄目なのだ。
本来ならば、ここにいるのは私の弟のはずだった。
私の双子の弟、フィアルデア・ラスティ・エドアルド。
愛称は私と同じフィア。もちろん二卵生だが、私たちは
一卵性のように似通っていた。
そのため、私は逃げ出した弟の代理としてここにいる。
父上が使用人やメイドに探させてはいるのだが、
要領のいい弟はまだ見つかっていないようだ。
そう、弟は勉強が大嫌いで乗馬やその他の運動も
あまり出来ないくせに、何故か要領だけはよかった。
私は知識欲が高く勉強も大好きで運動も得意
（言っておくが私はナルシストではない）だったけど、
要領が悪く不器用で弟とは正反対だ。

明るくて人懐こい性質の弟とは違い、人づきあいが
苦手でしゃべるのも苦手、暗くはないけど明るくもない。
　これで披露の式に出るなんて冗談じゃない。
あ、披露の式というのは、爵位を継いだものが王家の者や
貴族を招いて開くパーティーのことだ。
　なんと、あの馬鹿弟は披露の式に出ると言っておきながら、
招待状を送り終えてもうキャンセルできない前日に、
よりにもよって逃げ出してくれたのである。
　しかも、腹心のメイドを一人連れて。
弟は昔から私にコンプレックスを持っていたらしい。
　父上とおじいさまに話を聞くと、昔から
弟に私と比べる様な、弟のコンプレックスを刺激
するような話をかなりしていたらしい。
「少しは姉上を見習ってもう少し公爵家の
者らしくしろ！！」
　幾度となく、そんなことを言っていたのだという。
私は愕然としたが、二人を怒鳴ったところでどうなる
ものでもなかった。
　昨日、ずっとため込んでいたものを弟は吐き出したらしい。
「そんなに姉上がいいなら、姉上が爵位を継げばいいんだ！！」
　弟はそう喚くと部屋に閉じこもり、しばらくして父上が
訪ねて行くと、部屋はもぬけの殻、窓が開いて逃げた後があった、
ということだ。唯一の救いは、弟が女装をしていたことから、
公式には「私」が失踪したことになっていることくらいか。
　いや、よくない。私的には全然よくないが。
しかし、私の経歴や未来はどうなるのだと今ここに
いないものに怒鳴っても何にもならない。
　私的にはよくないが、「公爵家」的には伯爵を継ぐもの
が逃げたという前代未聞の大事件がバレなくて
安心なのだろう。私のいないところでそんな話を

していると、腰元(こしもと)のリルカに聞きだした。
この娘は私の乳姉妹(ちきょうだい)でとても仲がいい。
つまりは私の乳母の娘である。
「フィア様……」
私が悩んでいる間に、空は暗くなり始めていた。
きらめく星がきれいだと現実逃避をしたくなる。
腰元のリルカが気遣わしげに声をかけてきた。
私は震える手ですっかり冷めたミントティーをすする。
味なんて分かったものではない。
それでも、心を落ち着かせるために私は
それを飲むしかないのだ。
「リルカ……まだ、あの馬鹿は、フィアルデアは、
見つからないのか？」
「もうフィア様がお出になるしかないかと……」
「冗談じゃない！！　私に、あんな男どもの
相手をしろと！？」
自分でも裏返った声が出たのだと分かった。
私は別段深層の令嬢と言う訳ではないが、
そういう教育を施された事もあり、
男が苦手なのだ。誰にだって、苦手なことくらいある。
しかも、男としてそういう奴らの相手をしなくては
ならないなんてひどすぎる。
あいつらは話に聞く限りでは、辛辣で横柄で寸足らずな
やつららしい。弟がそう言っていた。
すべてが、そういう訳ではないとも言っていたが、
そんなの救いにもなりはしない。
私はリルカの人形みたいにかわいらしい顔を
涙目で睨みつけていた。ふわふわとしたクリーム色の
髪といい、ほんのり赤く染まった頬といい、
ほんとうにかわいい。だけど、中身は真っ黒黒だ。

「フィア様、お心をお決めになった方がいいのでは？」
何笑ってるんだよ、この腹黒メイド。
そんなに私の悲しむ顔がおもしろいか！？
何口元に手を当てておしとやかにごまかそうと
してるんだよ、私しか見ていないから。
ちょっとは優しいところもあると思った私が
間違いだった。いや、これでも私たちは仲がいいのだ。
彼女も仲良くしてくれているのだ。
多分……。多分、ね。

プロローグ　～私が代理伯爵になった訳～（後書き）

すみません、他の作品のストーリーが
浮かばなくなってきたので、気分転換に
新しい話を投稿してしまいました。
ですが、絶対に簡潔させるので、
これも見てください。

第一幕「私ってこの人達の主だよね！？」

私はフィア・ラスティ・エドアルド。
今現在、伯爵代理を務めている。
何故代理かというと、私が女だからだ。
私は朝起きると、逃げ出した弟と瓜二つの
顔を鏡で睨みつけながらベッドに腰かけていた。
腹黒メイドのリルカが馬鹿にしたように
笑っていた。本当にかわいいのに小憎らしい。
なんで乳母はこんな子を産んだのか。
というか、なんで心優しい乳母に育てられた子が
こんなに腹黒くなったのか。永遠の謎だ。
「フィア様、何を考えているかだだもれですよ」
付き合いが長い彼女には私の表情だけで
考えを読めるようだ。しだいに笑みが黒く
なってきたので、私は慌ててベッドから離れて
着替えを始めることにした。
何かまだ目が怖いので自分で上等そうな
（ていうか上等なんだけど）上下に着替える。
あれ、何で私メイドに怯えてんだろう。
私主だよね？　幼馴染とはいえ、この子の主だよね？
あ、ヤバイ。こっち睨んでる。
何で心読めるの、本当に。
いや、私が分かりやすいのかもしれないけど。
「フィア様、新しくあなたに使える従者がお見えに
なっているそうですよ。もたもたしてないで
早くお着換えになってくださいな」
じゃあ手伝ってよ。そう思った私のことなど
お見通しの彼女は、にっこりとそれはそれは

かわいらしい悪魔の笑みを浮かべたーー。

ようやく恐ろしいメイドから離れることができた。
かわいいのに目が笑っていないのだから本当に怖い。
何されるか分からない。一度怒らせた時、部屋を私が
怖いものが嫌いなのを知っているくせにオカルト
一色の部屋にされたことがある。
本もすべて怖そうなものばかりになっていた。
土下座して謝ったら許してもらえたけれど、
（蔵書も傷一つなく返ってきた）あの時の
恐怖はまだ忘れられない。
私の部屋、無事だよね？
私の冒険小説、無事だよね？
従者のあいさつよりも先に
安否を確認しに行きたい。
二度とオカルトティストな部屋なんて見たくもない。
私は一旦部屋に戻ろうとしたが、向こう側から見たこともない
顔の人とぶつかってしまった。
よろけた私は、その男に抱きとめられる。
言い忘れていたが、私は十四という年の割にもかなり小さい。
なので、簡単に男は私を受け止めてしまえたようだ。
「すみません、大丈夫ですか！？」
相手の男の人が謝ってきたので、
私は顔を赤らめて頭を下げた。
ここに若い男など、あまりいない。
ひょっとしたら、新しく入った従者だろうか。
「あの、あなたもしかして……」
「ごあいさつがまだでしたね。俺は、新しく
ここで働くことになりました。
アルカ＝レアンと申します」

私は彼を上から下まで眺めまわした。
私は並より小さい方だが、彼の方も背は高いのだろう。
元劇団の売れっ子だったという年配の、背が高い
メイドよりもかなり高いようだった。
見目は、良く分からないがいいのだろうか。
黒い髪に灰色の瞳をしている。
優しそうな人だなと私は思った。
と、私はまだ彼に抱かれていることに
気づいて身をよじった。
彼が慌てて降ろしてくれることを
望んだのだけれど、彼は私を降ろして
はくれそうにない。
気が付いていないのだろうか。
「あの、降ろしてください。わた……
僕はもう大丈夫なので」
危ない危ない。つい私って言うところだった。
あたしって自分を呼んでいる訳ではないから、
多分大丈夫だろうと気づいたのはこの後だった。
「あなた、女ですか？」
私の顔から血の気が引いた。
胸はさらしをまいてぺったんこにしているし
(元々そこまで大きくはないけど)、弟は
女顔だったから女だと思われても仕方がない。
私は、実は女なんだし。
でも、バレたら困るのだ。
私は必死でごまかそうとした。
「な、何言ってるんだ、僕は、男だ！！
心外だな女顔とはいえ女だと
勘違いされるなんて！！」
睨むように灰色の瞳を見つめる。

従者の男、アルカと名乗った彼は
さらに私を高く持ち上げて目線が
あうようにしたのであやうく私は
悲鳴を上げるところだった。
　何で、私に仕える人って私の
言うことを全然聞いてくれないのかな？
　私、この人達の主なのに……。
「本当に、あなたは男じゃないと言い張るんですね」
「だからそうなんだってば！！　僕は男なんだよ！！」
　何でこんなに食い下がってくるのかな、そこまで
私の演技は下手なの！？　ひょっとして何か違和感でも！？
　私の背中からだらだらと汗が流れて行くのが
自分でも分かった。後で、リルカは手伝ってくれないだろうから
自分で着替えよう、と思った矢先だった。
「私の運命の相手が、男では困るな」
　はい？　運命の相手？　それって私の事ですか？
私の脳内がクエスチョンマークでいっぱいになった。
「サファイアの瞳、きらめく金の髪、占い通りの相手だ。
元々信頼などしていなかったが……。
本当にいたとはな」
　あの～、あなた口調崩れてますよ。
さっき敬語だったじゃないですか、何で乱暴な言葉に
なっているんですか、いきなり。
　私はなんだか怖くて本音を言うことができなかった。
ぞわぞわと背中が粟立つ。怖い……。
　目の前の男はようやく私を降ろしてくれた。
助かったと思ったんだけど……。
「男だと言い張るなら、今ここで服を脱いで証明して見せろ」
「なっ／／／！？」
　私の顔が火を噴きそうなほど赤くなった。

実際に顔は見えないけど、多分そのくらい赤いと思う。
動くことのできない私にアルカが近づいてきた。
「脱げないのなら、私が手伝いましょうか？」
「……っ／／／　分かった、話すから！！
近づいてくるなあああああああっ！！」
絶叫した私は何でこうなったのだろうと思いながら
彼に説明するのだったーー。

私は全ての事情を彼に話すと、「絶対に他言するな」と命じた。
腹黒メイドのリルカが後にその様子を見ていた
ことを話して何故か憤慨していたが、その時の私は
それどころじゃなくてまったく気がつかなかったのだった。
「命令なんてできる立場だとお思いですか？
私が一言誰かに話せば、お家はとんでもないことになりますな」
私は一瞬、彼を鈍器のようなもので殴りたくなった。
幸い、近くにそのようなものはないので、私は
不祥事を起こさずには済んだようだ。
「聞けないのなら首にーー」
「くびにしたら全ての事情をばらします」
これからどうなるのだろう。初日から従者に正体を
見破られた私は、お先真っ暗だ。
「フィア様、どうしたのですか！？」
リルカの悲鳴のような声を聞きながら、
私はそのまま気を失ったーー。

第一幕「私ってこの人達の主だよね！？」（後書き）

代理とはいえ、めでたくなんとか
伯爵就任したフィア。しかし、
メイドも新しく来た従者も
言うことを聞いてくれません。
しかも、初日で正体バレました。
フィアはどうなってしまうのでしょうか、
次回もよろしくお願いします。

第二幕　「腹黒メイドは本当に怖い」

私は腹黒メイドであるリルカに、
廊下で正座させられていた。
文句を言いたかったけれど、
あまりに彼女の目が怖かったので
言うことができなかった。
目覚めた瞬間、「正座してください、
分かってますね」そう言った彼女の顔は
夜叉にもまして怖く見えた。
だから私は従うしかなかった。
一瞬だけ、私が主であることさえ
忘れていたほどだった。
すぐに気付いたけど、睨まれたので口を
出すことはやめた。
あれ？　何でだろう。目から汗が出る（泣）。

長々としたお説教がやっと終わり、
解放された私はベッドに倒れ込んだ。
足が痛い。びりびりとしびれて痛む。
文句を言ったらきっと腹黒い発言を
させるので私は黙っていた。
ちなみにお説教の内容は、昨日
新しく着た従者に正体がバレたことだった。
実はあまりに長すぎて右から左に
聞き流していたことはリルカには内緒だ。
知られたらこんどこそ部屋の内装を
変えられてしまうだろう、本当に彼女は恐ろしい。
私は心の中を見られる前に、きちんとした

伯爵の服装に着替えて外に出た。
私の（ていうか伯爵の）執務室には
すでに昨日の従者……あれ？
名前なんだったか忘れたけど彼がいた。
「おはよう」
「アルカ＝レアンだ」
まず初めにあいさつ返せよと私は
思ったけど言うことはできなかった。
名前を忘れていたことを見抜かれていたようだ。
私は相当に分かりやすいのかもしれない。
「俺のことを忘れていたとはな」
「ひゃっ！？　な、何！？
お、降ろせよ！！」
ひょいっ、と私はまるで仔猫のように
首根っこを掴まれてしまった。
言うことを聞いてくれない腹黒メイド
だってそんなことはしなかった。
慌てた私は羞恥と怒りで真っ赤になる。
その様子をアルカは楽しげに見つめていた。
嫌な奴だ。嫌な奴決定！！
リルカよりひどすぎる！！
リルカが聞いたら憤慨するかもしれないけど、
今彼女はここにはいないからその心配はない。
私は横目で彼を睨みつけていた。
と、ここで私がさらに慌てるような行動
を彼が取った。その腕に私を抱えたのである！！
前にも言ったかもしれないけど、私は
深層の令嬢の教育を受けてきた。
まあ、実際にそんな令嬢にはまったく
なってないけど。なので、男性と触れあったことも

ないしましてや抱きあげられるなんてもってのほかだ。
顔が熱くなるのを感じて私は彼をさらに鋭い目で睨みつけた。
「な、何すんだよ降ろせよ！！」
「随分軽いな」
「い、一応女だからな！！」
顔が近く、今にも口と口が近づきそうな
距離に私は慌てていた。
相手がちっとも顔色を変えないので、
理不尽とは思いながらも腹が立つ。
彼は女性と触れあったことがあるのだろうか。
「女、ねえ」
スッと彼の指が動いた。
な、なんと、私の胸をなぞったのである。
「大したことないな」
「ど、どこ触ってんだこのセクハラ野郎がああああっ！！」
私は彼を蹴りあげると彼の腕から脱出した。
彼が顔色を変えたけどそんなことかまっていられなかった。
胸を（さらし巻いてあるとはいえ）触られるなんて！！
私はこの男に殺意を抱いた。
凶器を持っていなくて本当によかった。
持っていたら今すぐにでも犯行に及んでいただろう。
「とても女には見えない言動だな」
「い、今は男装してるからな！！
それに、あんた相手に淑女ぶってもしょうがないだろ！！」
「ははは、違いないな」
笑われた。さらに私の殺気が高まっていくのが
自分でもわかる。本当にどこかに凶器ないかな？
多分よけられるとは思うけど投げつけるか
叩きつけてやりたい。
……羽根ペンって凶器になるかな？

そんな私が犯行に及ぶのを阻止するかのタイミングで、
にっこりと一見天使の笑顔を浮かべたリルカがやってきた。
「お茶とお菓子をお持ちしました。
休憩になさってはどうですか？」
　私はちょっとホッとしていた。
リルカはノックをしなかったのだが、
いつものことなので気にも留めない。
　彼には、リルカは非常に愛くるしい
少女に見えているのだろう。
　でも、私には分かる。
リルカは怒っていた。
　彼女は幼いころから何故か
私に執着しているのだ。
　誰かと私が仲良くしていたり、
誰かが私をいじることを嫌い、
そのたびに邪魔をする。
　自分はいじくり倒す癖に。
ひょっとしたらずっと部屋の外で
聞き耳を立てていたのかもしれない。
　恐ろしい娘だ。
「どうもリルカさん、でも、そんなことは
私がやりましたのに」
「いいえ、フィア様のお世話は私のお仕事ですから」
　外面がいい同士二人は気が合わないようだ。
同族嫌悪とかいうやつだろう。
　バチバチと火花のようなものが
二人の間にいきかっていた。
　あ、やばい仕事しないと。
私は二人を無視して仕事に戻ることにした。
　正直お菓子には魅かれるけど仕事を

ためて後で困るのはごめんだ。
カリカリという羽根ペンの音だけが響く。
リルカとアルカはとりあえず黙ってくれたみたいだ。
無言で睨みあっているけれど、声は発していない。
腹黒メイドは本当に怖い、意地悪従者もだけど。
私はそんなことを想いながら黙って
仕事に没頭するのだったーー。

第二幕　「腹黒メイドは本当に怖い」（後書き）

腹黒メイドと意地悪従者が火花を散らします。
お互い邪魔だと思っていますから。
さらに困ったことに陥るフィア。
彼女の運命は！？
　次回は腹黒メイドが本性を
あらわにします。

第三幕　「あんたらあたしに仕事させる気あるの！？」

私、フィアは今困っていた。
……大変困っていた。
かなり困っていた。
困るあまり、頭が現実逃避してしまうくらいに。
彼らは、私に仕事をさせる気があるんだろうか。
リルカとアルカはまだ睨みあっていた。
無言で、火花を散らしながら。
カリカリと羽根ペンを走らせる私だが、
しだいに苛立つ気持ちを抑えられなくなってきた。
できることなら羽根ペンとインク壺を二人に
投げつけてやりたいくらいだ。
後が怖いのと、絶対に自分で片付けさせられる
からしないけど。あの腹黒メイドはそういう子だ。
絶対にやったが最後させるに決まっている。
首にしないかって？　できるわけないじゃないか。
彼は祖父や父に優秀なメイドだと思われ、
いや思わせているのだから。
実際には、私の着替えとか手伝わないし、
私が散らかしたら（故意でも過失でも）自分で
片付けさせるし、私つきのくせに飲み物や食べ物
もってくるくらいしかしてくれないし。
今だってかえって仕事の邪魔してるし。
「邪魔するなら出てってくれないかな」
つい私は口を開いてそう言ってしまった。
口ゲンカをしていた二人が一斉に私を見る。
「フィア様、一つお聞きしたいんですが」
「何だよ！！」

イライラしている気持ちを逆なでするように、
リルカはかなり冷静な声で聞いてきた。
私は怒鳴るように言いながらペンを進める。
「私とアルカ殿どっちが大事ですか？」
「どっちも大事じゃねえよ！！　仕事の
方が大事だわ、二人とも出てけ！！」
あまりに腹が立ったため、私は二人を猫のように
つまみあげると部屋の外に蹴りだした。
二人が入ってくる前に鍵をかけて
ようやく一人になることに成功する。
ざまあみろ。やっとやってやった。
え？　言葉が汚い？　気にしないでほしい。
あんまりストレスがたまりすぎている時に
綺麗なお上品な言葉ばかり使えるはずがない。

三時間後、あらかたの仕事を片付け終えた私は、
（全部は終わらなかったけど）休憩のために
腕を振りまわしながら部屋の外に出た。
捨てられた子犬のような目の二人をスルーして、
私は食堂に向かうことにした。
ついてこようとする二人を睨みつけてやめさせる。
私はあの二人からしばらく離れていたかったのだ。
また仕事の邪魔をされたらたまったものではない。
いつもは、リルカも一応メイドとしての分はまきまえて
いるから、めったに仕事のじゃまなんてしないのだけれど、
アルカが私のそばにいるから邪魔せざるを得なかったようだ。
「まったく……疲れるったらないよ……」
ぶつぶつ言いながら私は食堂に行くと、好物の蜂蜜が
たっぷりかかったパンケーキとミルクティーを頼んだ。
キッチンメイドは、私のことをやっぱり男だと

思っているのだろう。ちょっと赤くなりながら
頭を下げ、てきぱきとそれらを作ってすぐに出してくれた。
サービスなのかチョコレートクッキーまで置いてある。
私はお礼を言うと、すぐに一口口に運んだ。
……おいしい。すごくホッとするような味だ。
疲れていた分、それらはすごくおいしく私に感じさせた。
キッチンメイド達がちらちらと私に熱っぽい視線を送っていたので、
やっぱりあの二人は置いてきてよかったなと私は思った。
純朴な優しいメイド達にトラウマは与えてはいけないと思う。
「あの、フィア様……」
「何？」
私がにっこりと笑うと、きゃあきゃあとなおさらメイド達が騒ぎ始めた。私には女たらしの素質でもあるのだろうか、彼女たちの顔はさっきより増して紅い。
いや、そんな素質あっても嬉しくないけど。
「リルカ様は、今日はいらっしゃらないのですか？」
「ああ。あの子はいつもそばにいるから置いてきた。いまはいいんだよ」
その後、私はメイド達と仲良く話をして気を良くし、さらに仕事をするために部屋に戻ることにした――。

部屋に戻る途中、私はアルカとリルカがまだ
睨みあっているのを見て立ち止った。
注意しようと口を開きかけた、その時。
「フィアに近づくな！！　従者ふぜいが！！」
リルカが敵意むき出しでアルカを怒鳴りつけたのだった。
完全に猫かぶりを解いてしまっている。
リルカはめったには敬語を崩さないのだ。
よっほど彼が気に食わないのだろう。

「お前だってメイドふぜいだろう」
リルカが本性を現したのを見て、アルカも口調を崩した。
私の前では口調をいつも崩しているけれど、リルカの前では
初めてなので彼女の顔が驚きに染まっている。
「私は、かなりの間フィアに仕えてる！！
お前より先輩なんだ口のきき方に気をつけろ！！」
「でも、メイドであることに変わりはないだろう」
言い合う二人に割り込むことができず、私は
どうしたらいいのだろうと考えていた。
盗み聞きする趣味はないのだけれど、このまま
行ったら両方に睨まれる気がして進めない。
「とにかく、必要以上にフィアに近づくことは
許さないからな！！　私が！！」
ぴしゃりと言いきったリルカが姿を消し、
しばらくしてから私は部屋に戻った。
部屋にはすでにアルカがいて、冷めたお茶と
お菓子を片づけていた。
それはリルカが持ってきてくれたものだが、
私はお腹がいっぱいだったし、彼は彼女の
持ってきたものをなんとなく食べたくなかったのだろう。
「毒、入ってないと思うぞ」
「入れそうですよね？　彼女」
「……そうかも」
もちろん私にはいれないが、彼が食べるのを見越して
もしも毒を盛っていたら？
リルカならやりかねない。
毒じゃなくてもしびれ薬とか平気で仕込みそうだ。
彼に毒を入れそうではないかと聞かれた
私は否定することができなかった。
彼女が、本性を現して喚き散らすのは、

私以外では彼が初めてだったのだから――。

第三幕　「あんたらあたしに仕事させる気あるの！？」（後書き）

リルカは下街育ちなので、本性を現すと
男言葉みたいな言葉を使います。
　今回は初めてフィアにのんびり
他のメイドとお話しながら
お菓子食べつつリフレッシュしてもらいました。
　でも、彼女の苦難はまだ続きます――。

第四幕　「君たち同族嫌悪って知ってる？」

……今日も朝が来た。来て、しまった。
眠い。ひどく眠い。起きたくない。
昨日までのできごととか、これからどうなるのかとか想ったらなんだか起きたくない。
「フィア様朝ですよ～」
チッ。空気の読めないメイドめ。
もう少し寝させてくれよ。
私は、眠いんだ。疲れてるんだ！！
ていうかちょっとは他のメイドみたいに、
優しくしてくれよこの腹黒メイドが！！
「フィア様？」
今日は絶対に嫌だ。
起きるものか。私はそう思いながら
布団にしがみついていた。
「フィア様？」
再び声がする。でも、それはリルカの声
じゃなかった。っていうか女性の声じゃない。
アルカか？　お前も空気が読めないのか！？
私はアルカの声も無視した。聞こえてない。
聞こえてないと心の中で念じる。
アルカも起こしに来るなんて、というか
この二人そっくりだよな？
同族嫌悪っていう言葉を
この二人は知っているのだろうか。
はたから見たらこの二人は
「兄妹」って言われても納得
出来そうなくらいそっくりだった。

無論外身じゃなくて中身がだけど。
いい加減にしてくれ。今日くらいいいじゃないか、
仕事はほとんどためてなんていないんだから。
しばらく私はうーうー唸りながら布団にくるまって
いたのだが、結局アルカに布団を引きはがされてしまった。
……容赦なくベッドから転げ落とされた私の頭に
けっこう大きなたんこぶができる。リルカがアルカに
ぎゃんぎゃん吠えかかったが、アルカはどこ吹く風だった――。

しかし、少し気分を落ち着けながら朝食をとっている最中に、
アルカが人の神経を逆なでするようなことを言った。
「よろこんでくださいフィア様。今日はあなたの休暇の日です」
「だったらもう少し寝させろおおおおおおおおおっ！！」
叩き起こされて置いて素直に喜べるはずがない。
私は思わずアルカの胸倉をつかみあげていた。
リルカはどこかかわいらしくも黒い笑みを浮かべたままだ。
何の嫌がらせだ！！と食ってかかるものの、彼は「ハハハ」と
わざとらしい笑いを響かせるばかりだった。
「もう一度寝ますか？」
「リルカ、お前ぶっとばされたいの？　私は一度起きたら
眠れないの知ってんだろ？」
そう、私は一度起きたらなかなか眠れない性質なのだ。
だからあの時眠りにしがみつこうと必死で抗ったのである。
知っているくせに黒い笑みを浮かべながらそう言うリルカに、
思わず殴りかかりそうになったが、他のメイド達がいるので
諦めた。彼女たちは私を『男』だと思っているので、私が
リルカを殴ったら『男が女を暴行した』現場になってしまう。
だからリルカもどうどうと私をからかったのだろう。
本当に腹黒いメイドだ。
「じゃあ一緒に出かけますか？」

「私もご一緒しますよ」
リルカが一緒に出かけることを提案してきた。
アルカも名乗りを上げる。だが、私はこんなお目付け役共と
一緒に出かけることが嫌だったので、全速力で屋敷を
飛び出したのだった。聞こえてきた怒声は全力でスルーする。
「ふぅっ、やっと一人になれたあ！！」
私は満面の笑みで町を歩いていた。私たちが住む町、シルディアは
大きくていろいろなお店が並んでいてとても楽しい。
伯爵代理になるまでは、私はよく屋敷を抜け出してたびたび買い物を
していたのだ。お金は持っているし（主に父や祖父から口止め代として
絞り取ったお小遣いがたくさんある）、かなり楽しめそうだ。
今は伯爵代理の身の上なのでかわいらしい女物の服は買えないが。
元々そういう服はあまり好きじゃないので平気だ。
まあ、どうしても買いたい女物の服があれば、「友達（もしくは恋人）へのプレゼントだと言っておけばいい。
「さってと、どこ行こうかな～……ってぇ！！」
上機嫌な私にぶつかってきた奴がいた。人相の悪そうな男だ。
ぶつけた肩をさすりながら私は彼を睨みつける。
どこ見て歩いているんだ！！　そう私が怒鳴りつける前に、
相手の男が私を怒鳴りつけるのが先だった。
「どこ見てあるいてやがるんだ！！　ええ？　坊っちゃんよお」
「先にぶつかってきたのはそちらでしょう」
私は暴言が口をついて出ないように比較的冷静な声で答えた。
こういう相手に暴言をぶつけてしまうと、いろいろ面倒だ。
しかし、男は私の言葉を聞いているのかいないのか、しきりに
私の服装をじろじろながめているのだった。
最初は女だと疑われているのではないかとあせったが、ふと
気付いた。彼は私が「いいところの坊っちゃん」であることを

確認していたのだ。私の服装は子爵にふさわしい上等な服だったから。
「もちろん慰謝料は払ってくれるんだろうな？」
「冗談ではありません。あなたは怪我もしていませんし、僕がそんなものを払う義理はどこにもないですよ」
おおおっ、と私と男のやりとりをただ見ているギャラリーから歓声が上がった。見ているなら助けてくれよ、と思う。
私が女の姿のままだったら助けてくれたんだろうか？
「てめえ！！　調子に乗ってんじゃねえぞ！！」
男は私が命知らずの馬鹿だと勘違いしたようだ。
いきなり岩のように堅そうな拳を固めると、いきなり私に殴りかかってきた。だが、私に言わせると命知らずは向こうの方だと思う。私をなよやかな貴族の坊っちゃんだと勘違いしたのが運のつきだ。
「やあぁぁぁ！！」
私は男の拳をひらりとかわすと、気合いの声と共に男の鳩尾に自らの拳思い切り叩きこんだ。
ぐたりと気を失った男がもたれかかってくる。
気絶した人を放り投げるのもなんなので、私は慈悲の心を出して男を地面に寝かせてやることにした。
ホッと一息ついて、さあ店を見て回ろうか、と思った矢先にそれは起こったのだった。
「おいヘインド！！　大丈夫か！？」
「おいてめえ！！　なめたマネしてくれるじゃねえか！！」
「貴族だからって俺らは容赦しねえぞ！！」
ヤバイ！！　私が倒した男の仲間が三人も出て来てしまった。
いくら私が武術や護身術の訓練を受けていても、しょせんは女。
こんな大人数に勝てるわけがない。
たらり、と私の額に汗が流れた。
どうしたらいいんだろう。一瞬思考が止まった私は、ぴくりとも

動けずにその場に突っ立っていた。ギャラリーが急に心配そうな顔になる。だったら助けてくれ、と言うことすら今の私にはできないことなのだった。と――。
「お兄さん、こっち」
ぐいっ、と腕を掴んだ手があった。労働者らしい荒れた手だ。声はまだ声変わり前なのか女の子みたいだったけれど、ごつごつとした手の感触で呼んだ相手が男なのだと分かった。
「こっちなら見つからないよ早く！」
「あ、ああ……！！」
私は腕を引かれるままに彼についていった。ふわふわとした栗色の髪と澄んだ瞳のまるで女の子のような顔立ちの子だった。
「あ、待ちやがれ！！」
男の一人がめざとく気づいて私たちを追ってこようとする。しかし、彼が私に声をかけたのを皮切りに、ギャラリー達も私の味方になってくれた。殴ったり蹴ったりしつつ私たちに彼らを近づけないようにしてくれている。
「レイリィ！！　いる！？」
「もちろん！！」
男の子がギャラリーに向かって声を投げると、彼と似た顔立ちのかわいらしい女の子が飛び出してきた。
彼女も私たちと同じように走り出す。
小一時間ほど走ったのだろうか、レイリィと呼ばれた少女と、彼と私がたどり着いたのは一軒のパン屋の前だった。
焼き立てのパンの香ばしい匂いが鼻をくすぐる。
「危ないところだったね、お兄さん。僕ライリィって言うんだ。お兄さんの名前は？」
ここで本名を名乗ったら身分と性別が割れる。
仕方なく私は愛称の方を口にした。
「あ、ああ僕の名前はフィアだよ。助けてくれてありがとう」
「でも、兄の助けなんていらなかったんじゃないですか？

フィアさんとっても強かったですし」
「う、うるさいなレイリィ！　だって、多勢に無勢は卑怯だろ！？」
この兄妹はとても仲がいいようだ。妹のレイリィがからかうように言って兄のライリィが赤くなって反論する。
つい私はくすくす笑ってしまった。
「さあさあ兄さん？　早くフィアさんを中に招待してよ」
「言われなくてもそうするって！！　……フィア、中に入らない？パンとコーヒーくらいなら出せるよ」
「あ、ありがとう……」
ちょっと迷ったが、お腹がすいていたので私は素直に彼の招待を受けることにした。まだ温かい菓子パンを受け取り、レイリィが淹れてくれたいい匂いのコーヒーと共に食べる。
「あ、おいしい……」
「あ、よかった！！　このパン僕が作ったんだよ。
僕達兄弟はここでパン屋をやってるんだ」
「そうなんだ。凄いね」
「元々は親父とお袋の店なんだけどね」
元々は父親と母親の店で、今二人でやっていると
いうことは両親はすでにいないのだろう。
私はそれ以上突っ込んで聞かなかった。
ライリィをちらりと盗み見る。
私の視線に気づいたライリィがにっこりと屈託なく笑った。
……あれ？　な、なんでだろ胸が痛い……。
感じたことのない気持ちだった。胸が締め付けられるように痛む。ひょっとして、私ライリィのこと……！！
「あ、あの、僕そろそろ帰らなくちゃ」
「あ、そうなの？　じゃあね、また会えたらいいな」
「今度はパン以外のものも売っているのでそれもごちそうしますね」
ヒラヒラと手を振る兄妹に私は笑顔を向けた。
二人だけでも頑張る彼らを見ていると、私も頑張らなくちゃな、と

思うような気持ちにさせてくれる。
温かい気持ちで家に帰った私は、リルカとアルカに冷たい視線を向けられるのだがそれはまた別の話だ――。

第四幕　「君たち同族嫌悪って知ってる？」（後書き）

ついにフィアの初恋の相手、ライリィ登場です。
アルカやリルカとは違う、優しくて純朴な
彼に魅かれるフィア。彼女の恋路はどうなって
しまうのか？　そしてアルカとリルカは――？
次回もよろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3693s/

代理伯爵私と意地悪従者の恋物語

2011年12月18日09時49分発行